

句集

風の翼

小路紫峽

昭和十七年～三十年

灯に触れて吉兆の鯛透きにけり

葬り火は短く枯れし草に燃ゆ

きさらぎや拾ひて軽き母の骨

永き日や画布をへだてゝ裸婦と画家

迷ひ来し蝶滝壺を抜けられず

メーデーの列につきつゝわれは記者

火の山にいつくニ夕村祭り来る

浜暑しだまつてゆけばなほ暑し

かたき葉にあたりし雨の音涼し

庇より出てくる雲や昼寝覚

ハイヒール爪先立てゝ墓洗ふ

ある窓の夜なべの顔にぶつゝかる

下駄はいて貸本屋まで雁の空

コスモスの風紅白をまきちらし

夜寒の灯ちらばつてをり操作場

父鶴におくれ三羽の母子鶴

冬波の洞にしぶけば泣くといふ

子の肩にとどまらずして銀杏散る

おでん屋の戸のあちら開きこちら開き

飴ねぶる頬の動きや毛糸編む

婢の皿を洗へば聖夜果つ

年忘れサンドウィッチではもの足らず

カント忌や兄の蒐めし哲学書

昭和三十一年～三十五年

初 茜 展 望 閣 の 灯 の 消 さ れ

火 の 鳥 の 羽 ば た き 出 で よ と ん ど 焚 く

ス キ ー 抱 く 一 歩 も 列 を ゆ づ ら じ と

母の忌の供華買ひに出し町は春

檻褸の火をふりかざしつゝ土堤を焼く

開きたる絵本の雛の起ちあがり

毛氈に浮き足の立つひよかなかな

ものゝ芽に捨てし煙草の灰となり

手を振るは聞こえぬ返事耕せる

矛先をわれに向けたる木の芽かな

ひしめける顔に吾子あり卒業す

春月にとゞかんとして火の粉消え

犬吠えてわれにかへりし花疲れ

書きかけのペンのころがる朝寝かな

春惜しむ鞆を柵に押しつけて

てのひらに水のしたゝる苗を売る

眼鏡とりはづして眇苗を選ぶ

衝立をとれば煤けし大夏炉

裁ち鋏垣につつこみバラを剪る

音立てゝ閉まる扉に薔薇をどり

新鮮な卵の上の蠅叩

蜘蛛の巣のがんじがらめに常夜灯

前脚をふんばりて蟻立ち止る

白砂糖帽子となりし苺食ぶ

剪りのこしたる山百合のそつぽ向き

棧橋を駈け来て夕立傘もたず

重ねをく柄の乱れたる団扇かな

はゞたける日覆の石ひきづられ

たるみたる縞をひつぱる日覆かな

登山小屋南京錠の逆立てる

滝茶屋の床を歩けば卓動く

欄干におく手にひゞき瀧落つる

瀧風に飛びし葉橋にとゞまらず

鐘撞いてこゝが涼しと立ち去らず

岩清水茶碗の座りにくきかな

ポケットにゆがみし汗の手帳かな

噴水のひつこめば像いぶかしみ

立ち読みの文字のちらつく夜店かな

歯にあたりコップの氷とけてをらず

ビアホール夕日失せたる卓並ぶ

卓を打ち雨とびあがるビアホール

荒砂利に椅子落着かずビアホール

洗面器金魚の紅がはじきあひ

銅像にもたれて昼寝乞食かな

脳天を焼きはじめたる西日かな

炎天やのぞきし店の奥見えず

魚屋の線香けぶる西日かな

紐張ればわれもわれもと水着干す

水着ぬぐシャワーの出たり出なんだり

鉾毒のいまもはげしき帰省かな

帰省子の顔突き出して汽車とまり

ひとねむりしてからのこと避暑便り

避暑の風呂まはりうろうろしつゝ焚く

文字を縫ひひゞの走りし墓洗ふ

海坂を流灯の灯ののぼりつめ

子供らの駈けて踊のはじまらず

訪ねしはよくよくのこと野分中

うたゝ寝に頁とびたる夜学かな

バスのゆれどほし秋草さゝげ持ち

まつすぐにのぼる露の蛾貴船道

干鰯ひつつく車雨ざらし

秋晴や汐のvari目波をどり

のけものにしてある菊や菊花展

飛ぶ松葉二転三転松手入

波の上に投げし煙草火十三夜

紅葉冷え襖を閉めるわけにいかず

水漬きたる枝いち早く紅葉しぬ

鶴の宿二男三男その後生れ

犬の糞凍てたる鶴の墓並ぶ

網を越す鴨の羽音のそれにけり

鴨網をのがれし鴨のとびちがひ

顔見えずなりし鴨網たゝみけり

うしろから押し寄せながら鴨泳ぐ

羽博つ鴨雁のすゝむをさえぎりぬ

ドア開きし寒さ車内にひろがりぬ

瀧風にうちのめされて草枯るゝ

濡れホース巻きて枯芝まみれかな

枯芝にチューブの絵具踏みつけぬ

門川の湖につながり菜を洗ふ

おでん屋のノート鉛筆くゝりつけ

寒鰯の滑りとまれば糶られり

辞書とりに起ちしついでの炭をつぐ

ストーヴに寄せ集めても椅子足らず

水馴棹二本並べて布団干す

頬かむり広き額をかくしえず

助手席の女もすなる頬被り

起つ夫を上目づかひや毛糸あむ

肩にこぼるゝは壁土日向ぼこ

押しあへる襖と柱隙間風

ねむらんとする顔をさす隙間風

横たはるホースつたひに火事見舞

ひゞわれし岩もつれつゝ瀧涸るゝ

筋一つちがふさびねや年の市

昭和三十六年～四十年

膝叩き歌留多取る手をはげましぬ

飯噴けば凍てたる窓を開きけり

エレベーターガールかじかみ足踏みす

をしみなく拍手を送り悴みぬ

戸が開いて将棋倒しのスキーかな

水噴いてゐる氷盤のゆらぎけり

水仙や吠ゆる彼の犬ヒステリー

あの会のこの会の世話日脚のぶ

春の雪もつるゝほどもなく止みぬ

春宵のこれからといふ人出かな

壁照らすヘッドライトの花の影

花暗くなりて夕づつあらぬ辺に

堰に近づきてたじろぐ落花かな

プラットのはしに下ろされ花疲れ

初蝶を見しおどろきの声合ひぬ

春風や頬の涙をたづねられ

春風や先争へる反古駈くる

風車しまひに雨をさそひけり

遠足の高校生に圧倒され

牡丹にさす傘風に浮きあがり

緋ふごとくゆれゆく風の麦熟るゝ

旅の荷をほつたらかしてまず蚊遣

バス暑し坐つてみても立つてみても

空晴れてあまりかぼそき那智の瀧

日射すとき底せりあがる泉かな

縁涼しみどり児足をふんばりて

海に捨つ反古舞ひもどる涼しさよ

栓抜きを手ばなす間なきラムネ売り

空ら瓶を手早くのけてラムネ売る

ラムネ瓶冷やす立てたり倒したり

昼寝覺つきつけられし文字読めず

電車いま西日のがるゝわけにいかず

止まりたるシャワーの太き雫落つ

夜泳ぎの汐に流るゝとは知らず

避暑の荷をほどこきもあへず寝ころびぬ

道わかりやすし避暑地の矢印は

道舗装されてひろがる避暑地かな

風の日の走馬灯地に置いて売る

道に干す漁網の匂ひ秋暑し

揚花火一旦消えて大開き

灯親し少しも金にならぬ稿

秋灯下聖書に心戻りけり

葛の山雲つくばかり行在所

風向きに従はず萩はねもどる

またよける露のごとくに峠の灯

ネオン駆けめぐりなかなか月出でず

見えてゐて鯨なかなか喰ひつかず

弁当を開きたるとき鯨かゝる

瘤並びあひて前山粧ひぬ

懸崖の菊を貫きえぬ夕日

朝寒の蛾の翅立てず這ひにけり

寄せあつめられしごとくに菊残る

大地より起きあがらんと残る菊

くちづけにわかる鼓動や草紅葉

幹がくれなる彼彼女神の留守

小つむじの落葉駈けつゝ燃ゆるなり

紅葉焚く炎を巫女がいぶかしむ

ひとたびは高あがりして銀杏散る

短日や問ひつめられてゐて泣く子

白らみたる雨の湖面浮寝鳥

地場の鴨足るはずのなき鴨料理

鴨高しせんかたなしの網かざし

村人の目勘定して鴨減りぬ

いつとなく並ぶ氷の上の鴨

白息の吹きわかれたるうなじかな

火のごとくほとばしる息白きかな

落つる日のまつしぐらなり枯木中

伝言板寒し片寄せられし文字

枯葎弁当殻を支えたる

懸崖菊裏返されて枯れにけり

枯れてゐてほつたらかさね鉢の菊

楔噛みたれど二つに割れぬ楯

枝 ゆらぐ 焚火の炎 高くのび

夜 焚火にかゞめば 円き膝頭

水 皺に灯ををどらして 紙を漉く

玻璃さゝえきれざる棧や隙間風

フレームの玻璃をさゝえて釘曲る

フレームのずりさがる玻璃つくるはず

涸れ瀧のベンチひつくり返りけり

露地塀におしつけられて火事見舞

賀状書く名簿こぼれの名を拾ひ

じつとしてゐる子はまれやクリスマス

昭和四十一年～四十五年

ちぎれ雲焼けて初日のまだ出でず

牙折りし氷柱雫を落さざる

湯疲れの虜となりし避寒かな

海の日
の沈めば
終る絵踏
かな

空高く戸樋
はづれゐし
雪解かな

首洗池の
ひねもす
凍て解け
ず

短冊のきりきり舞ひて梅散らず

倒れたる海苔簀ところをかへて干す

干し網の浦々海苔に富めりけり

よき月のいづちに泊てむ流し雛

月花の心さぐらむ西行忌

切通し椿うなづくことやめず

幹
一
つ
な
る
紅
椿
白
椿

笑
は
せ
て
く
れ
し
祝
辞
や
卒
業
す

空
わ
た
る
有
馬
風
の
落
花
か
な

汐干茶屋実生ばかりの松原に

相打てる梢をふまえ囀れる

手をあげて立つ銅像に囀れる

才人の出でずとなげく虚子忌かな

染卵ちらと画才の見られけり

風紋におちこちすなる凧の影

山越えのひとかたまりの遍路かな

ぬかるみをものかは雨の牡丹見る

石庭に向きて筆とる夏書かな

雨期の衣を干して難民街の窓

蠅止まる今踏まれたるさくらんぼ

吊橋や螢火襖なすところ

袂這ふ螢飛ぶこと知らぬげに

雨水のはけぬ畝間に苺浮く

旗立てゝをらぬ畑の苺摘む

縞裂けし日覆の夜も巻かれずに

耳鳴りの虻かと思ふ泉かな

亭涼し閉店の椅子たゞまるる

亭涼し落ちし提灯吊りもせず

DAIMARUとよめて涼しき灯の異国

片蔭の翼張りたる総督府

砂日傘卓ころがして倒れけり

ポスターの女は裸星の竹

花火の尾星吊り下げて消えにけり

母に聞く寝物語や震災忌

島暗くひとにぎりほど夜長の灯

露の世の些事と云へども一大事

灯の海の高
速高架月今宵

外灯をはな
れて月の蛾と
ぞなる

糸瓜忌やいま
の世も弟子仲
たがひ

子規居士の恋やいかにと祀りけり

天高し噴水白き炎のび

虻刺してひと騒動や栗拾ふ

時雨忌や家事かへりみぬ一作者

時雨忌やわざわざ伊賀にゆかずとも

うたかたの恋もかくやと帰り咲く

鴨の棹夕日を刎ねて曲りけり

こゝの茶屋吊られし鴨を見る日なし

浜寒し口笛に犬ふりむかず

糶
台にたゞら踏む人息白し

枯
蔓の拋物線のゆらゆらす

枯
蔓のもつれを解けば折れて落つ

下敷に焼けざる反古や菊を焚く

菊焚きし灰のさほどに嵩なさず

南蛮の衣ぞ黒き屏風かな

道よりも低き灯の窓紙を漉く

フレームの鉄管湯気を洩らしけり

フレームの小さき花の匂ひけり

拾ひたる恋といふべし日記買ふ

肩を押し買ふべき日記探しけり

門限をせずよくはずむ年忘れ

昭和四十六年～五十一年

耳さとき老にまけまじ歌留多会

左義長や北国の日のいま上る

大とんどさながらネ口の焚くごとく

口ザリオを繰る胼の手をいたはりぬ

焼却炉火を吐いてをる雪間かな

臣虚子と詠みし筑紫の野を焼ける

民
宿
の
椀
の
重
さ
よ
田
螺
汁

長
旅
の
第
一
日
目
西
行
忌

舷
に
立
小
便
や
鳥
雲
に

田楽やいと鄙びたる塗りの箱

黒潮のおもてきらめく椿かな

一女性長き祈りや春の昼

虚子いますごとく貴船の落花かな

思ひ川こゝよと落花たゝみかな

東山西山花の虚子忌かな

公園も湖のうち 凧

寺の松賞むる 遍路の寄りにけり

人丸忌長押三十六歌仙

天がかかる藤のこぼせし花ならむ

広葉うちさわぎて朴も花開く

提灯に似たりバナナの袋掛け

短夜のダウンタウン街夜を知らず

梅天の海の中道糸のごと

溝の上の畳踏ませぬ水見舞

踏まれても踏まれても落ちさくらんぼ

青芝の丘なる寢墓数知れず

暮れがての西を彩る雷火かな

日覆に吊るは蕃社の土産物

道をしへ濡れたる土を嫌ひけり

夏山の疵がゲレンデなりしかな

木刀の杖と用ひし登山かな

泉あり帝の産湯なりしとや

針金に玉つらなりし滝しぶき

雲海は空の砂漠が暮れんとす

ハワイアンダンスに真夜の卓涼し

冷房の卓のナプキン花のごと

夕焼の富士は機翼にあらはれし

炎天のエーデルワイス砂に影

峠越すまでの夕焼消えずあれ

雨乞の蠟燭岩に涙垂れ

日焼して紙屑買ひの彼老いぬ

船の舵握る蕃社の子は跣足

目を細め見るやプールの波の日を

汐筋のよたよた動くヨットかな

たはむねの子規の箱庭虫払

岩鏡日を失へばたゞの草

ぶつかるはブーゲンビリアバス走る

パパヤ熟れ富家の塀の赤煉瓦

飲めとある椰子の実をもてあましけり

ストローの動くコップの風は秋

掃苔や実朝政子つぎは虚子

一卓に王家陳家の施餓鬼かな

流灯の夕闇油くさきかな

一湾を狭しと開く花火かな

誘ひ見し野外映画や震災忌

夜の萩を見よとひきとめられにけり

しだれ萩すとなすとなと花落とす

首のばし蓑虫土に立ちにけり

天高し端山の瘤をつきあはせ

石垣の荒き隙あり秋の風

秋風の庭遠州の名に恥ぢず

きりぎしのまがね光りや築の秋

落石のひゞきしばしば下り築

踏みわたる簀が叫ぶなり下り築

いたづらに築尻震へ鮎落ちず

羽のごと刃をひるがへし林檎むく

簀を走る雨の坊主や菊花展

ぺしやんこになりたるあはれ菊枕

うらかかへしおもてかへしぬ菊枕

栗焼ける乙女は伏目道問はむ

豊作や開拓哀史嘘のごと

白髯の北の寒さや翁の忌

湖べりの一宿得たり翁の忌

民芸の蓑笠買はむ翁の忌

まばたきてふと白き目となりし鷺

一点の火を消さじとす落葉かな

華人の名参拝帖に神迎へ

湖の日はどこに落つるや鴨料理

鴨宿のはなれの客は老作家

みちのくの雪に肥えたる鴨を捕る

鴨宿や五つの湖の三つ見え

皿よごす血をうとみけり鴨料理

湖は寒しと洩れ日常ならず

枯蔓のみどりの弦を張りにけり

大空に反りかへり
芦枯れにけり

冬山にガードレールの
白き線

狩人と逢ふ
峠道土佐に落つ

愚かなる犬の寝てをり狩の宿

油噴く汐木まじれる焚火かな

フレイムの扉は二重露滂沱

涸れ瀧の礫は音をたてにけり

道の右側は来る人年暮るゝ

あとがき

いくたびも句集の発行を思ひ立ち、古い作品の整理に手をつけ乍ら、職務多忙と作品の未熟さに嫌気がさして、いづれも中途半端に放棄してしまつた。

このたび阿波野青畝先生、森田峠さんの強い勧めにより、全く短時日の間に、作品に目を通した。

虚子、青畝、年男、風生選の約四千五百句の中から、約千五百句を自選し、青畝先生に見て頂いた。

再選された作品から、特にものの変化に目をとめた三百六十句を選んだ。
急いで取捨選択したため、他にも見逃した句があらうかと思はれる。

昭和三十年以後は、千原草之さんをはじめ、緑樹会研究会の若い人達と勉強をつづけることが出来、ややもすると怠惰に陥る心をきびしく鞭打たれた。

虚子、青畝先生に学んだ多くの教訓は、作句の基礎となり、ゆるぎない信念となつてゐる。

虚子先生が、かつて私の作品をとりあげ批評された末尾に、「力めて倦まざらんことを希ふ」といふ言葉を書いて下さった。

この一と言は、作句生活の大きな励ましとなり、指針ともなっている。

身にあまる序文を頂き、句集について助言を賜はった阿波野青畝先生、よき友人として跋文を下さった千原草之さんのご厚意に深く謝意を捧げる次第である。

書名の『風の翼』は、旧約聖書詩篇第百四篇から選んだ。

青春時代に神を讃美する詩として作句に志した。

第一句集の名前は、聖書から選びたいという切なる希望がやうやくにして叶えられた。

生涯倦まずたゆまず、季語を大切に取扱ひつつ、ひたすら写生に努力したいと願っている。

昭和五十二年三月十五日

小路紫峡